

責任を問われるこれから

鹿児島大学歯学部小児歯科学講座 森 主 宜 延

二十周年おめでとうございます。

小児歯科学会が春期と秋期の年2回が春期と地方会に分かれ、より地域に密着した活動をお願いスタートした当時の思い出はつきません。開催当時は、小児歯科の活発な萌芽期でもあり、大学も若き指導者のもと意気揚々と活動をしていたように記憶しております。その後、研究も多方面に広がり、新しい科学に押しまわれながら、その追隨に負われ、発足時の理念が危うく感じられた時もありました。しかしながら、このような流れは、原点を見据える余裕と自分を見つめ反省する気持ちさえあれば、今後の発展への可逆的な波にすぎません。その証拠に、地方会も発足当時の地域に密着した理念に立ち返り、大学主導から地域で活躍されている先生方中心へと改革が進みつつあります。迷いながらも、着実に地域における小児の健康への寄与を実践していくことが、小児歯科学が社会において記憶に残る学問へと定着し、健康への意識が、口腔から子供たちに文化として定着すれば幸いに思います。

さて、この過程において、社会から問われていることは、社会との関わりにおける責任であると考えます。そこで小児歯科の認定医までの歴史的流れをみてみますと、子供たちに信頼できる歯科医療を供給するため、各自の責任のもと、標榜医制度ができました。しかし、誰も彼もが責任なく標榜する事態となり、学会がその能力を認定する認定医制度が設定されました。しかしながら、またまた、“なれるからなる”といった事態を招いてしまったことは賢明な皆様もお気づきと思います。その後、試験制度が導入されましたが、本当に必要なことは、認定する側がフィルターを設ける以前に、各自が認定医として責任を果たせるか否か自ら問いかけることがなによりも必要なことではないでしょうか？このような姿勢が、小児歯科医療への信頼と、信頼による口腔健康意識を加速すると考えます。さらに、この姿勢は、発足時の理念を育成し、これから小児歯科を志す若き歯科医の信頼を得、医療人として正しい考え方を伝える文化を定着させると考えます。自主的に、権利の社会から、義務と権利の使い分けを決定する責任を重んじる視点をこの九州の地方会から発信していくことが、これから20年の課題ではないでしょうか？